



長田 豊臣

NAGATA Toyoomi

立命館
理事長

ディスアドバンテージを アドバンテージに変える



関西に拠点を置く大学にとって、東京一極集中はディスアドバンテージです。しかし私は、それをいかにしてアドバンテージに変えていくかを絶えず考えています。私どもの取り組みの紹介を通じ、立命館が進める学園創造の底流にあるものをお伝えできればと思います。

一つ目は、2000年に大分県別府市に開設した立命館アジア太平洋大学(APU)です。構想発表当初は、「あんな不便な場所に大学をつくってどうするのか」と、多くの人から言われました。確かに東京や大阪からは遠いですが、アジアからは近いことこそがアドバンテージと考え、その立地を生かし、これまで日本になかった世界に目を向けた大学をつくりたいと考えました。開設準備にあたり、アジアを中心に世界各国・地域に本学教職員を派遣、現地でAPUへの留学を呼びかけました。おかげさまで今では、学生のうち約半分を占める2,680名の留学生が在籍する、世界的にも稀有かつ極めてユニークな大学として高い評価をいただきました。

二つ目は、今年4月に開設した「大阪いばらきキャンパス」です。当初から地域・社会との連携を意識して構想しましたので、門も塀もありません。キャンパスに隣接して茨木市の公園があり、毎日多くの地域の子どもたちでぎわっています。また、学舎の半分はホール・図書館などの市民開放施設であり、茨木商工会議所にも入っていただきました。商工会議所がキャンパス内に入るのは、日本の大学で初めてのことのようです。さらに今後は、大都市・大阪を意識した社会人向けの次世代リーダー育成講座をスタートさせる予定です。大阪での展開に先立って、昨春から東京で「立命館西園寺塾」を開始しました。日本、とりわけ関西

では社会人が実践的に学ぶ場として十分に機能した例は残念ながら少ないので現実です。将来を期待される業種の異なる人たちが徹底的にディスカッションを行い、答えのない問題について頭を振り絞って考えるような場をつくることに挑戦したいと思っています。

これから日本の大学教育に求められるのは、教養教育ではないかと思っています。海外のパーティに参加しても会場の隅で日本人同士が話している姿を見かけますが、そんなことではグローバル社会で戦えません。欧米の大学は一貫して教養教育を重視し、学生たちに提供しています。このことが決定的なコミュニケーション能力の差となって表れているのです。英語を話せることは、真のグローバル人材にとって必要条件の一つでしかありません。大切なことは、相手の文化や習慣を理解したうえで、世界の人々と共に通の問題認識を持ってコミュニケーションがとれるかどうかです。そのためにも、基礎となる教養教育、つまり単なる教養ではなく「知的に発想できる」教養が必要不可欠です。また、相手のことを理解するためには想像力が必要です。相手の状況を繊細に見極め、客観的な判断を下す力のことでもあります。いくら実行力があってもそれだけでは、何事も成し遂げられません。その想像力を養うためには、例えば、適切な時期に、心にしみるような書物と出会えるかどうか、そういった出会いの場をつくることも、教育の大切な役割です。

「大阪いばらきキャンパス」のコンセプトのひとつは「アジアのゲートウェイ」です。このキャンパスを社会連携のフロントラインとし、関西の経済界の方々とともに、世界を舞台に活躍する人材を育てていきたいと考えています。 (談)